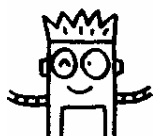


## 「塩の道」って、どんな道なの



海岸と山地を結ぶ道で、特に古くから塩を運ぶために重要だった道のことだよ。

日本の各地では、古代から、海岸と内陸の山地を結ぶ道が開かれてきました。この道は、いろいろな物資や文化を運ぶ道でしたが、特に、人間が生きていくために欠かせない塩を中心に運んだことから、「塩の道」とよばれています。

### 最も古くて長い「塩の道」がある

「塩の道」の中で、最も古くて長い道とされているのが、新潟県の糸魚川から、長野県の松本を通過して塩尻に至る「北塩ルート」と、静岡県の相良から、掛川・青崩峠を通過して塩尻に至る「南塩ルート」で、全部の長さは350キロメートルになります。「南塩ルート」の途中は、伊那街道を通るルートと、南アルプスを縫うように走るルートに分かれています。

### 牛方やボッカが、けわしい危険な道を運んだ

「北塩ルート」のうち、糸魚川と松本を結ぶ千国街道（糸魚川街道・松本街道ともいう）は、戦国時代に上杉謙信が、敵である武田信玄に塩を送った道と伝えられています。江戸時代には、加賀藩（石川県）から輸入された塩が、6頭ほどの牛を使って荷物を運ぶ牛方や、荷物を背負って運ぶ人たち（ボッカ）によって運ばれました。姫川の谷をさかのぼり、大網峠をこえる道は、せまくてけわしい危険な道で、がけから落ちて亡くなった人もいます。また、冬は雪が深く、牛が進めないのも、もっぱらボッカによる輸送に頼りました。大町から南は、馬も利用しました。

